

## はしがき

本書は、文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究の手法確立—世界と地域の共存のパラダイムを求めて」における領域B02「地域関連の論理」の公募研究「南方関与の論理」（平成5～7年度）の研究成果報告書である。

本共同研究は、これまでの研究をふまえて、日本の「南方関与」に脈打つ論理をより広角的・重層的に見出だすことを目的として、清水元（長崎県立大学大学院経済学研究科教授）・蔡史君（津田塾大学学芸学部助教授）・波多野澄雄（筑波大学社会科学系助教授）・早瀬晋三（大阪市立大学文学部助教授）・小島勝（龍谷大学文学部教授）の5名で遂行されたものである。

日本の南方関与に関する研究は、矢野暢著『「南進」の系譜』（中公新書、1975）によって開始されたが、これを契機に、「南進論・政治過程」「軍事」「経済進出」「移民・在留邦人社会」「人権・道義的観点」「交流」「現地の人々の見方」などと分類される領域で、急速に研究が進捗してきた（小島勝『「南進」の系譜以後』矢野暢編『講座東南アジア学10 東南アジアと日本』[弘文堂、1991]参照）。そうした中で、矢野氏が提起した問題意識である①「アジア主義」との非連続性、②明治時代の「無告の民」への評価、③大正時代の「南進論」の特質、④大東亜共栄圏構想と南方関与との関連性、⑤戦後の日本人の東南アジア進出につきまとう精神性と戦前と「南進」との連続性、⑥南方関与を行なった個々の日本人や個々の進出企業の個別研究、という課題の追究は今なお進行中であり、われわれの共同研究もこの研究課題を継承している。

矢野氏によれば、「南方関与」とは、「日本人の南方との自然な関わりの総体」のことであり、この「南方関与」が国策と結びついて、侵略的傾向を帯びた局面が「南進」であるとするが、この見解は今日広く定着している。からゆきさんや民間の商人、商社・銀行・メーカーの経済人ないし企業人、政治家や軍人、教育者や僧侶など多くの日本人が、「南方」すなわち現在の東南アジア地域と関わったが、その関わり方に脈打つ論理をより広角的・重層的に取り出して、「地域関連の論理」を総合的に抽出する一役を果たしたいと考えて研究を進めてきた。

3年間の研究の経過については、本重点領域研究の平成5年から7年度の『活動の記録』を参照していただきたいが、上記の研究課題を念頭において、各共同研究者の現在の関心を深めてきた。

本班の研究報告として、清水元は「西海から見た日本史」・『「アジア主義」と「南方関与」—第一次大戦期を中心として」、蔡史君は「日本の南進政策に於ける台湾人の活動」、波

多野澄雄は「大東亜会議と大東亜宣言の文脈」・「戦時『アジア新秩序論』と戦後補償」、早瀬晋三は「フィリピン行き渡航者名簿の分析」・「明治期『南進論』と『大東亜共栄圏』」、小島勝は「『日本』の南方関与の多重性—フィリピンのダバオにおける沖縄県人子弟と混血児童生徒の教育問題を通して」を行ない、この重点領域研究の『総合的地域研究』において、清水元は「西海の海人と南進論」、波多野澄雄は「戦時日本の”Wilsonianism”とその遺産」・「『地域主義』構想の戦前・戦中・戦後」、早瀬晋三は「近現代日米貿易のなかの東・東南アジア」、小島勝は「地域連関の論理—『在外子弟教育論』より見た南方関与の論理」・「『南洋』・『南方』概念について」を発表してきた。また、早瀬晋三は『フィリピン行き渡航者調査（1901～39年）—外務省外交史料館文書「海外渡航者名簿」より』（本重点領域研究成果報告書シリーズ：No. 8）を刊行した。

本書は、本共同研究の成果のまとめとして、清水元が「『南方関与』と『アジア主義』についての覚書」、蔡史君が「日本の南進における文化工作論と華僑政策—『台湾本島人利用論』を兼ねて、波多野澄雄が「戦時日本の『地域主義』と『国際主義』」、早瀬晋三が「フィリピンをめぐる明治期『南進論』と『大東亜共栄圏』」、小島勝が「南方関与の多重性と教育の論理—フィリピンとバギオ日本人学校の混血二世教育」を執筆した。いずれも、上記の6つの研究課題と関連しながら、清水論文は、「南進論のアジア主義的変容」を主として論じ、「国際主義（近代化）」・「膨張主義」・「人種主義」を基軸として「南進論」の位置づけを試みている。蔡論文は、日本の南進における華僑政策としての「文化工作」に台湾人が利用された模様を論述している。また、波多野論文は大東亜共栄圏構想の中にも、「国際主義」と「地域主義」の格闘があったことを指摘し、早瀬論文は、フィリピンにおける明治期「南進論」の特徴を示し、大東亜共栄圏構想との関連における意味を分析している。そして、小島論文は、南方関与の多重性を指摘し、主として混血二世教育問題を論じてその事例とした。

多忙な3年間であったが、浅学な私を導いていただいた共同研究者の先生方に深謝するとともに、この共同研究をステップとして、今後ともよりいっそう南方関与研究が進展していくことを念じるものである。山影進先生はじめ「地域連関の論理」計画班の先生方、また事務局の先生方・職員の皆様にも大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。

1996年11月

研究代表者 小島 勝